10 郷土文化財センター運営委員会

一 調査研究のテーマ

センター内の所蔵品の維持管理と資料目録の作成(データーベース化)をすすめる。 また、常設展示の工夫、会報やホームページの活用を通して会員への広報活動を行う。

二 調査研究の成果

1. 年間活動の概要

(1) 実施日

第1回委員会 5月11日(金)年間計画の立案、会報掲載資料分担と調査

第2回委員会 6月12日 (火) 岡村千馬太先生の展示コーナーの開設作業

センター開放日6月16日(土)「安曇野の先人等に学ぶ会」

第3回委員会 7月13日(火)常設展示物、所蔵庫内の防虫剤の交換、標本類 のアルコール補充作業

センター開放日8月 3日(金) 実技講習会「哲学講座」

第4回委員会 9月18日 (火) 常設展示の一部配置替え作業

第5回委員会11月13日(火)会報原稿と来年度の方向の検討

第6回委員会 1月25日(金)調査研究のまとめ

(2)成果と反省

①収蔵物の維持管理について

センター内の収蔵物の維持管理は、標本等の状態を確認しながら、全てに防虫剤の交換やアルコール封入液の補充を行った。毎年、保管箱や展示ケースに市販の防虫剤を数個ずつ入れ替える作業をしている、昆虫標本の中にはかなり傷んだり、地歴品の鉄製馬具等の腐食が進んだりしているものもみられることから、貴重な所蔵品の保管管理のあり方全般について専門機関等から指導を得る必要がある。また定期的に入れ替え展示するなどして、多くの方に観ていただけるようにしていきたい。

②常設展示とセンター開放日について

センター内の展示物を観ていただく機会として、教育会の行事に併せてセンター 開放日を実施した。本年度は教育文化会館を会場に行われた「安曇野の先人等に学 ぶ会」、実技講習会「哲学講座」の折に実施した。「安曇野の先人等に学ぶ会」では 常設展示に岡村千馬太先生のコーナーを設けて年譜や直筆の簡書、関係する書籍を 展示した。また、委員もこれらの行事に参加して来場を直接呼びかけ、多くの方に 見学していただくことができた。今後も、センター開放日を教育会や他の行事に併 せて実施して、会員はじめ一般の方にも観ていただく機会として計画していく。

③会報やホームページへの情報発信について郷土文化財センターに保管されている多くの貴重な所蔵品を、会員や地域・学校で役立てていくという考えを引き継ぎ、年5回の教育会会報に紹介コーナーを設けていただいた。今年度から委員が分担して、常設展示や所蔵庫にある書、絵画、彫刻、書籍、標本(昆虫、植物、地歴)の5つに分類した中から調査したものを原稿にまとめ順次掲載した。また、調査したものについて詳しい内容を教育会のホームページに掲載したり、郷土文化財センター内に掲



示したりした。今後もこうした活動から多くの方にセンター内所蔵品について知ってもらう機会としたい。また、将来は資料目録のコンピュータ管理をすすめるために情報委員会と連携して、目録から画像や資料内容を検索できるようなシステム化を図りたい。

<今年度教育会の会報に掲載した資料>

郷土の文化財⑪「昆虫標本 オオルリシジミ(鱗翅目シジミチョウ科)」 (会報第31号)

郷土の文化財⑫「安曇野市の彫刻家 細萱美穂人作 八十書記」 (会報第32号)

郷土の文化財⑬「昭和8年 小学校裁縫科教授要目 南安曇郡裁縫研究会」(会報第33号)

郷土の文化財⑭「昭和6年に豊科で採集されたタガメの標本」 (会報第34号)

郷土の文化財⑮「昭和 63 年教育会百周年記念講演 高田好胤氏の書『道』」(会報第 35 号)

三 調査活動を終えて

郷土文化財センター内には、研究室及び収蔵庫に教科書をはじめ刊行物120点余、沿革誌など1500冊余、美術品100点余、昭和の初期から収集された博物品、古文書や出土品等膨大な数を収蔵している。これらは、先輩方の努力と教育、調査研究への情熱により収集されたものであり、学術的にも極めて貴重なものばかりである。これを未来に引き継ぐため、適切な保存管理について専門的な立場からの意見や指導を仰ぎ、対策を立てていくことが必要である。特に金属製の馬具や鉄剣類の復元や防錆処理は急がなくてはならないひとつとなっている。そして、これらを活用していくことが本会の使命である。そこで、郷土文化財センター運営委員会では、委員自らが調査研究しながら学んだことを情報公開し、分類整理して必要なものからデジタル化を図る予定である。郷土の諸先輩の志を広く知っていただけるように、展示企画等をさらに工夫していきたい。

郷土文化財センター収蔵庫、収蔵物の紹介

館内の収蔵庫をはじめ書庫には、会員にもあまり知られていない物品がたくさんある。中でも 昆虫や植物の標本類では、昭和初期に安曇野や松本、上高地や北アルプスの高山などで採集され ている。これらには一つひとつの標本に採取の日時場所などが克明に記されてあり、現在では絶 滅したものや絶滅危惧種に記されているものも多い。これらの標本類は当時の先輩の先生たちが 苦労しながら時間をかけて採集し、学術的な見識を持って分類され、寄贈されたものである。ま た、現在の収蔵庫にこうして保管されるようになったのは、昭和40年代に信州大学の先生に何 度も来館していただき、専門的な見地からご指導いただきながら

年数をかけて収蔵ケースに分類整理されたものである。

~郷土文化財センター収蔵物から学ぶ ~ 郷土の文化財⑪



オオルリシジミ

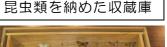
学名:Shijimiaeoides divinus 分類: 鱗翅目シジミチョウ科

開翅長:3~4cm

食草:マメ科のクララ クララの穂先に卵を産みつける

オオルリシジミの雌

オオルリシジミは現在, 環境省レッドデータブックで絶滅危惧 I類、長野県では絶滅危惧 I B類に指定されており、早急に保護が 必要な代表的なシジミチョウです. 文化財センターの蝶類標本の 中にも昭和7年、8年に採取されたオオルリシジミの標本がありま す。これらが採取された当時は、中部、東北地方に広く生息して







上阜堀金三田 昭和8年5月27日採集 下み穂高西穂高 昭和7年6月5日採集

いましたが、現在では九州阿蘇地方と長野県堀金地域、東御市、飯山市だけとなりました。 オオルリシジミはクララという植物にしか卵を生みつけないこと、食草となるクララが開発や農 地整備により激減したこと、農薬散布によりこの蝶そのものが減少したことにより、その数を減 らしてしまいました。群馬県や埼玉県などではクララが数多く自生するようになりましたが、一 度絶滅した地域にはオオルリシジミは復活していないそうです。現在、国営アルプスあづみの公 園内にある保護施設では、保護活動によりオオルリシジミが復活しつつあり、その貴重な姿を見 ることができます。

(今年度教育会会報に掲載したものに加筆)

本年五月に、碌山公園研成ホールで「た生に寄贈していただいたを務められたり、日彫展正会員として作ったを務められたり、日彫展正会員として作った。その追力に圧倒されました。 ます。その作品の中から平成 十六年に寄贈していただいた のが写真の石膏塑像作品でも精力的に活動しておられるとより、県別に出会ったことが出発点である」と語っておられるとお のち」が見る者に伝わってき た私たちの大先輩です。中学校の美術教師として安曇

フッサンがてわたる創作に 「喜寿記

か百点以上展示され、作活動の集大成ともい寿記念・細萱 美穂人

い人

作品を出品されたりと、・県展の彫刻部の審査委員 野 今長

郷 土 文 化 財 (12)

安曇野 市の 彫 刻 (望月 家 (元誉氏) 穂暖 作 •

石膏塑像 作

品

小学校裁縫科教授要目(昭和八年)

郷土の文化財(3)

南安曇郡裁縫研究会

昭和八年、小学校で女子に対して行われていた裁縫科の教授要 目のなかに、セーラーカラーの上着とズボンの製作についての指 導方法が書かれている箇所がある。自分の体の寸法を測り、型紙 を起こし、布を裁断し、難しい衿作りなどを行いながら全22時 間で仕上げるように計画されている。使用する布は夏向きにはポ プリン・ギンガム・キャラコ・薄毛セル、冬向きにはサージ・メ ルトン・ラシャ・ヘル・小倉などその時代の最新材料が取り上げ られている。女性が生活時間のほとんどを家事や手伝いに費やさ なければならなかった時代に、家庭を守りながら生きていくため に身につけて欲しいさまざまな裁縫の知識と技能が詰まっている



ことに驚かされる。この教授要目に沿って実践がどの程度なされたかについて調査してみたい。 古い時代の教授要目や教科書は、教育内容が時代を反映している例として大変興味深い資料であ る。一部を常時展示しているのでご覧ください。

郷 土 文化 財 (14)

昭 和 六年に 豊科で採集された タガメ \mathcal{O}

本

が 仲 間 あ タ 皆さん、 <u>る</u>。 ガ 半 メ は 翅 タ 目 日 ガ 本 メという生物 に \mathcal{O} 入 水 ŋ 生 ま 昆 虫 す \mathcal{O} を実際に見 体 中 で を 最 裏 返 大 で、 す たことが لح 頭 分 類 部 上 12 あ 針 力 ŋ 状 メ ŧ A \mathcal{O} す П カコ 吻 \mathcal{O}

曇 に す 数 整 な を 備 野 田 0 長 急 に 0 7 野 棲 激 水 池 L 県 に む \mathcal{O} 田 ま で 減 消 B 亀 1 は 5 失 池 \mathcal{O} な ま 残 連 し、 で L 念 تلح 普 想 た。 な 絶 \mathcal{O} 通 か 環 が 滅 に 6 6 境 名 が 見 絶 危 変 5 付 滅 惧 化 け れ さ 種 に ま 5 に れ ょ L れ 指 る 0 た た 定され 生 7 が タ 物 ガ メ に 近 は、 分 年 薬 今 類 全 0 Ė さ 玉 使 カュ 幻 れ 的 用 0 \mathcal{O} 7 に Þ 7 そ 生 圃 は 1 物 ま 場 安 \mathcal{O}



計2:昭和6年5月17日と記されたタガメの標本(体長70mm) 【右は大きさ比較のためのアブラゼミ】

中 風 覧く 格 \mathcal{O} あ 王 、ださ る 者 姿 と を L ぜ て

さ た 手 タ 貴 に 郷 n 本 が 重 ょ 12 土 7 な n は 文 1 採 個 化 ま タ す 体 ガ 集 先 財 0 保 メ さ 輩 セ \mathcal{O} 水 存 \mathcal{O} n \mathcal{O}



郷 土 0 文化財⑮

高 田好胤 書 道

安曇当 教時 育薬会師 百寺 周管 年長 一記念式 典たに高 招田 か好 れ胤 `氏 との、当 、再講時 書が カュ れ昭

会がありますがいました。体制進を行って実まった伽藍の再「薬師寺中興」 が修寄再の、学進建祖 高旅をのご 高田氏も十八年間結然行で薬師寺を訪れて、金堂や西内のために全国をまれていまれ てて、てどいま親も 続れ塔わす ける等り くてつにはの、りお親 亡 こ \mathcal{O} でいご仕の ら説建演

き会ま会郷 し誌土 たの文 書とと、 しもこタ にのし 是講内 非演に の創 覧内刊 くだ ろださい 容を改り いめ保 で味さ われ かうことが が教 で育

今年 - 度教育会会報に 掲 載し たもも 0 に 加 筆